

E-16 島嶼社会の凝集性にみる家庭生活の理念について — 広島市似島の調査 —
比治山女短大 下東艶子

目的 広島市街地から海上2kmの近距離にあり、日常、市街地との緊密なつながりを
持ちながら、昔ながらの衣食住の生活様式を維持するには、住民の思考と行動に同一性を
求めなければならない。この社会力(ソーシャルフォース)を維持させる要因を家庭経営
において生活理念の実態の中に探求したい。

方法 過去3年間にわたり主として、民俗学的聴取法により、時にはアンケートにより、
実態調査を続け、今回、中間報告に過ぎないがまとめてみた。

結果 似島という島嶼社会に顕著な凝集性をみるがそれは何に由来してきたかを考察し
た。それは、似島の歴史、経済、宗教上の諸条件と通婚規制に凝集力の根源を見出した。
なかでも、浄土真宗への全面的帰依と間断なき信仰生活とが島内居住者、特に、女性と児
童の統合に大きく貢献している。一年の節目は注意深く守られ、正月の氏神様の参拜、仕
事始め(船出)、とんど、お逮夜、2月の節分、3月の雛祭、彼岸、8月の盆、9月の月
見、10月の荒神社大祭、12月の報恩講と仕事納め(帰船)、餅つき、煤払い等があるが、
これらの年中行事に住民総ぐるみで参加する。また、毎日曜日には小学生の約6割が寺に
集まり、説教を聞いたり、読経の稽古をする。非行や盗難は無く、平和な島である。
信仰生活に表われた凝集性の指標は仏事への集団参加、宗教教育、住民組織の共同作業に
見出すことができる。

かくて、信仰に根ざした伝統ある社会力は、個々の家庭生活の理念を育て、その家庭経
営の指導的役割を果たして来たものと考えられる。